

## 『下克上寝取られ2』

元学園のマドンナの友香は

気弱なフリーターの巨根を啜え込みながら

傲慢な医者 of 夫の租チンを嘲笑う。

そして寝取られ夫は自分で租チンを握り……

玉子王子 著

## 1章 美しい妻が寝取られた

——なんていい裸体だ。あんな男には、絶対釣り合わない。

末松は、医者である。

大きな屋敷に美しい妻と二人暮らし。

彼が結婚前に設計させて建てた家。

その書斎の横が寝室になっている。

書斎から、寝室を覗ける穴を作ってもらっていた。

冷静に考えれば、何を覗くのかわからない穴だ。

それに今、食いつくようにへばりついている。

末松の視線の先にあるのは、妻。

夫婦のベッドの上で、目を瞑って男の頭を抱いている。

男は、妻の丸々とした乳房に吸い付き、チュバチュバと隣の部屋まで聞こえる音を鳴らしていた。

——ああ、あの乳……最近揉んでないな。

ここ半年、ご無沙汰だった。

学会の出張から戻って、久しぶりにしようと思ったら拒まれた。

「あっはあっ！ いいっ！ 郷田さんのいいわっ！」

久しぶりというか、出張前には毎日していたのだ。

末松は三十五歳、妻は三十歳。

まだまだ、仲がよければ毎日出来る年齢だろう。

それが、すっかりご無沙汰。

変わりに現れたのが、今妻に腰を振っている男というわけだ。

「もっとついてええ！ もっとおお！」

股間は見えない。

二人がする時は、常に薄暗いので体はよく見えない。

が、大したことはないと思っていた。

——フリーターだからな。馬鹿ってことだ。

どうやら、その男は末松と同じ年らしい。

妻が怪しいので興信所に頼んだ結果、あっさり浮上した浮気相手だ。

それが、いまや自宅で妻を抱いている。

末松は出かけているという事になっていた。

書斎には地下道が通っており、いざというとき脱出も出来るし、黙って侵入も出来る。

末松自身は、モノには自信がない。

だが、大きさなど意味がないと知っているつもりだ。

何度も、大きさには物足りないもので妻を絶頂に導いてきた。

医者のお卵だったころから、女に不自由したことはない。

——郷田とやらは、妻に拾ってもらうまで童貞だったんじゃないか？

なんとなくそう思う。

何一つ、劣った所などないと信じきっていた。

「今の世の中が、学歴がすべてだ」

それで劣るということは、能力で劣っているということ。

「ああん！ すっごいわ！」



唇を噛む。

妻の声は、自分のときより楽しそうに聞こえる。

——いや、離れてるからそんな気がするだけだ。してるときは必死なんだしな。

と、体を離す男。

太股を持ち上げ、自分の体を越えさせ、後背位の体勢となる。

「突いてっ！ 突いてっ！ おチ○ポで突いてっ！ それで私を支配してっ！」

——友香、何でこんなことを……

大学のアイドルだった。

ミスコンで優勝。

末松が彼女と付き合いだしたとき、周りの末松への評価がグンと上がったのを感じた。

そのまま別れず、結婚にこぎつけ、今に至る。

毎日夜には満足させてきたはずだ。

それが、この状況。

何とかしなければならぬ。

妻は、浮気に気づかれている事に気づいていない。

何とか裏で動いて郷田に手を引かせる。

それで、元通りになる。

浮気をせめて、関係を壊す気はない。

——そうだ、あんな男のために……

思いつつ、末松は眉を顰める。

自分のモノが、パンツの中でそり立っている。

この半年、していないのだ。

自分で情けなく思いながら出すが、それは最低限。

明日にも関係が修復するかもしれないのだ、無駄うちはしたくなかった。

だから、目の前で寝取られセックスなどされれば、立ってしまう。

握りそうになるが、必死で押さえる。

間男が妻を抱くのを見ながら自慰など、惨め過ぎるではないか。

ため息をつく。

見ているも仕方ないので、覗き穴を締めようとする。

と、一瞬目に入る。

一際大きく郷田が腰を引いたのと、興奮が高まって自らも腰を振る妻の動きが連動したのが。

といっても、いい連動ではない。

離れる形の悪い連動。

それで、ズルッと郷田の一物が抜けた。

僅かな光りで、雄々しくそそり立つそれが照らされた。

「なっ」

思わず声が出る。

ビク、と妻が震える。

それに、末松は気づかない。

再び挿入された郷田のものの根元に視線が集中していた。

——何だ今のは……大きい……いや、見間違いだ。あんな底辺が、巨根なんてあるわけがない。この俺が、短小包茎なんだぞ。

妻の叫びは大きい。

普通の言葉は、覗き穴の向こうまでは届かない。

「ああ、郷田さんのおチンチ○大きいわあ。うふふ、公彦さんの一桁チンチ○とは大違いよ」

いいつつ、書斎のほうを見る。

覗き穴があることを知っているわけではない。

——何か聞こえたわよね？

不思議に思いつつ、バックで寝取られつつそちらを向いて、眉を顰める。

——光りが……

漏れて見えた。

そうならないように、覗くときは後ろにカーテンを引くように上手くなっている。

左右に本棚を置いて、カーテンはその本棚用ですと見せかける形だ。

しかし動揺して末松はカーテンを揺らし、皺を作って隙間をあけてしまった。

薄暗い寝室に、その光りが僅かに見えた。

普通の家に住んでいるなら、なんとも思わないだろう。

だが友香が住んでいるのは、ドラマに出てきそうな豪邸だ。

光りが妙なところから差しているのを見たら、一瞬「覗き穴」という言葉が浮かんでしまう。

——まさかね。あの自信過剰な夫なら、この現場見たら絶対はいって来るはずだもん。

それでも、明日には確かめてみようと思う友香。

家でずっといて、することもないのだ。

「本当に、籠の鳥よ」

そんな友香を救ってくれたのが郷田だった。

——優しく話を聞いてくれるし、アソコもこんなだし……うふふ、彼がせめてサラリーマンだったなら……

流石に医者妻をやめてフリーターと結婚はきつい。

股間以外、夫に勝る所などない郷田である。

それでも、友香は彼を手放す気はまったくなかった。

夫は形の上では大事にしてくれるが、モノとしてコレクションしているだけのように感じるのだ。

その点、郷田はそんな人一人コレクションするほどの力など持ちようもない。

だから否応なく、支えあう形にもなる。

「どう、友香さん」

「友香って呼んでよ。うふふ、ベッドの中じゃ、絶対あなたの方が上なんだから。チンチ○の差！ んん、ああっ！ ゴリゴリくるっ！ 夫の短小チ○ポじゃ絶対いけない、気持ちいい高い山に登っちゃうっ！ 寝取られおマ○コいっちゃうのおお！」

ベッドの上で腰を突き上げ、胸の辺りはシーツの上という三角形のような後背位。

その形で手を自分の股間に伸ばし、女の豆をクリクリクリと高速で弄りまくる。

後背位だとそこへの攻めが弱いのを知り尽くしていた。

同時に、もう片方の手は首の近くに。

郷田に貰ったシンプルな首飾りが下がっていた。

夫に貰った数々のアクセサリーのどれと比べても数分の一以下の値段。

それでも、つけていたい物はもうそれだけだった。

本当にしょぼい、C学生が恋人に贈るような代物。

大人の郷田が、それぐらいしか買えない自分をどう思っているか。

それでも、せめてとプレゼントしてくれた。

それを受け取ったとき、さまざまな思いがこみ上げて友香は涙が出た。

大げさだと驚きつつも、贈った郷田も泣いていた。

こんな一瞬は、十年近い夫との生活では一度もなかったと思うと、本当に「ただ優秀なだけの人間」だと気づかざるをえなかった。

目を瞑り、クリを弄って首飾りを握り締める友香。

「あっあっあっあっあっあっあっ！ 郷田さんのビッグなおチ○ポでいっちゃううっ！」

「おおっ！ いけっ、寝取られてデカチ○でいけっ！」

尻の肉を掴み、バンバンバンバンと音を立ててピストンする郷田。二人の汗が飛び散り、夫婦のためのベッドを寝取られ汁で汚染していく。

末松は、もう覗き穴を離れていた。

これ以上見ていたら、自分を押しえられない。

抜いてしまう。

階段を下り、地下道に入る。

途中で、部屋。

そこは秘密のプレイルームだ。

独身時代に集めたAVが大量にある。

それらしいものを見て、さっさと抜く。

それで抜いた事にするのだ。

まだギンギンの、寝取られて元気な一物のことは考えずに。

「『強引ナンパ男に空手女子○生がやりすぎキ○タマ制裁』か……これでいこう」

DVDをセット。

ズボンを下ろし、小物を皮ごと握る。そして、空いた手で肉袋を揉む。

時間もないので、お気に入りのシーンまで飛ばす。

「一思いにキ○タマ潰して去勢しろ」

「名残惜しいけど、仕方ないですねえ。そろそろ帰って、みんな宿題もしなきゃならないでしょうし」

「ま、まて、まて、卑怯だぞ、二人がかりなんて……」

「止めの玉潰しいくですう！」

「あがああ！」

——女子○生にキ○タマを……たまらん。

背の高い少女が半裸の男を羽交い絞めにし、もう一人が電気あんまで抵抗不能の男の生殖器、最大急所の肉玉を踏み潰すというラスト。

現代を舞台にした物語なので、潰れた玉はナノテクによる薬で治る。

だから安心して、女の子たちは悪い男のキ〇タマを潰せるのだ。

末松も安心して自分の肉玉を潰される所を想像し、肉玉を揉んで気持ちよく射精する。

「ぬほお、キ〇タマが……」

なぜそんな致命的な打撃を受けることを想像して性的興奮を覚えるのか。

末松にも自分の性癖のことはわからなかった。

一つ思い浮かぶことがあるとすれば、幼い頃姉と喧嘩して肉玉を蹴られたことがあった。

激痛で転げまわったら、姉が心配して慰め、膝に頭を乗せて撫でてくれた。

かなり前傾姿勢をとった姉。

ちょっと成長し始めていたオッパイが頭に当たった。

当時はもう一緒に風呂に入るのもやめていた。

オッパイ大きくなってきてるんだ、となんともいえない不思議な感じがしたのを覚えている。

肉玉の痛みは治まり、いつの間にか一物が立っていた。

それが、金蹴り＝性的興奮というある種のパターンを作ったのかもしれない。

ズボンを履いて、地下道から外に出る。

間男の問題をどうにか解決しなければならない。

やはり、それは金しかないか。

だが、間男に金を渡すなど癪だ。

——ヤクザに頼む……ってわけにもいかないよな。知り合いもないし。後々たかられちゃたまらん。それに余計な第三者に知られたら、友香が俺が知っているを知るきっかけになるかも。

それは嫌だ。

妻が悪いとはいえ、気まずくなるのは望まない。

絶対に別れたくない。仲が悪くなるのもごめんだ。

寝取られたぐらいで、末松の愛は変わらなかった。

ならどうするか。

——悩んだことないからな、こんなことじゃ。俺が声かければ女は大抵靡いたし、浮気もしなかったし。

将来医者になり、美味しい暮らしをするのが確定しているような末松は優良株だった。

それで女にもてて、浮気もされなかった。

「結局の所、俺は男としての魅力があるってわけだ」

車の中で笑う。

この余裕が、半年の間の無為無策を支えていた。

しかし限界が来つつあった。

体験版終わり

よろしければ、続きは製品版で